



## 松坂屋秘話ヒストリー ～戦国から江戸時代～

平成24年12月1日(土) → 平成25年2月26日(火)

松坂屋は、創業以来400年、歴史上の多くの人物と関わりを持ってきた。

ここでは、戦国から江戸時代にいたる5人の人物、織田信長、淀殿、千姫、徳川吉宗、徳川宗春をとりあげ、松坂屋との由縁をたどる。

織田信長—創業者は信長の家臣であったが、本能寺の変のあと町人となり、呉服小間物問屋を開業した。

淀 殿—信長の姪・淀殿着用と伝わる慶長小袖が、松坂屋コレクションの至宝として収蔵されている。

千 姫—淀殿の姪・千姫が着用したと伝わる水葵模様小袖が、松坂屋コレクションに加えられている。

徳川吉宗—松坂屋大阪店の前身えびす屋の創業者は、開店祝いに吉宗からえびす像を拝領した。

徳川宗春—8代将軍吉宗と張り合った宗春の時代に、呉服小間物問屋から呉服太物小売りに転業した。



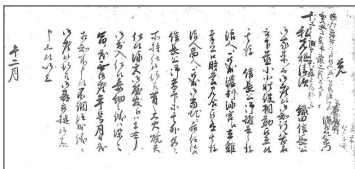
### 織田信長(1534-1582)との秘話ヒストリー

松坂屋の創業者・伊藤源左衛門(1564?-1615)は、蘭丸祐道を名乗り織田信長の小姓役を務めていた。有名な森蘭丸(1565-1582)とは同世代である。信長が本能寺で横死した後、清須に出て、源左衛門と名を改め商人となった。源左衛門の兄・仁兵衛家には、信長から拝領の鐘、払子、馬柄杓などが伝わる。

織田信長

### 『寛延旧家集』提出の伊藤家由緒

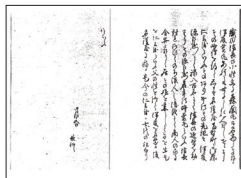
伊藤次郎左衛門家が、町奉行の求めに応じて提出した由緒書は、次男のせいひ、『寛延旧家集』には掲載されていない。その「寛」には、「信長から拝領の朱印状などを所持していたが、万治の大火で焼失した」などが記されている。



『寛延旧家集』提出の伊藤家由緒

### 内閣文庫の中の伊藤蘭丸

国立公文書館(東京都千代田区北の丸公園)の「内閣文庫」の中の『弘賢随筆』に、榊原長行が著した「伊藤蘭丸」が載っている。「信長討たれ給ひてのち浪人し、清須にて商人の家に食客となりて居り。その娘を妻として子を生む」と、通説とは異なることが記されている。



内閣文庫の中の伊藤蘭丸

### 『尾張名所図会』伊藤呉服店

『尾張名所図会』は、岡田啓、野口道直が編纂し、小田切春江が挿画を描いた。前編は天保12(1841)年に刊行された。その巻一に「京町通茶屋町 伊藤呉服店」が出てくる。「この家はもと尾張本質の武士にして、先祖源左衛門幼名蘭丸(森蘭丸とは別人なり)、贈太政大臣信長公に官仕し、天正十年公薨逝の後、浪人して清須にありしが、……」必ずしも事実通りではないが、概要は伝えている。



『尾張名所図会』伊藤呉服店



### 淀殿(1569?-1615)との秘話ヒストリー

豊臣秀吉の側室、秀頼の母。浅井長政と織田信長の妹・お市の方の長女として、戦国時代に生をうけた淀殿(茶々)は、絢爛豪華な桃山時代の中でも、ひとときわあでやかな存在であった。松坂屋では、この淀殿が着用したと伝わる慶長小袖「染分縷子地御所車花鳥文様縹箔小袖」を昭和7年に入手した。慶長小袖の白眉といわれ、平成23年6月27日に重要文化財に指定された。

### 復元「染分縷子地御所車花鳥文様縹箔小袖」

日展の染織工芸作家であり、刺繍と風俗の研究家としても名高い岸本景春から、「伝淀殿所用」として、昭和7年に購入した。文様に桐、鳳凰、御所車が使われている格式の高さもあって、内外から「淀殿所用という伝えもうなずけるものがある」と評価された。購入から2年後の昭和9年、「時代衣裳を蒐集して、現代衣裳の発展と向上に資す」という染織参考館設立の趣旨を実現すべく、復元に踏み切った。

\*平成23年6月27日に重要文化財に指定された原本は、近年の研究では、少し時代が下るともいわれている。

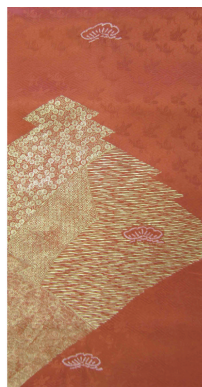
復元慶長小袖「染分縷子地御所車花鳥文様縹箔小袖」



### 「慶長小袖」摺箔復元見本裂

松坂屋が昭和58年に試みた、慶長小袖「染分縷子地御所車花鳥文様縹箔小袖」の摺箔復元見本裂。摺箔とは、布地に糊を置き、その上に金銀の箔を押しあて、乾燥後、余分な箔を取り除いて文様を表現する技法。

「慶長小袖」摺箔復元見本裂

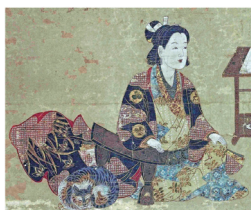


### 祐道、豊臣秀頼の麾下に駆けつける

織田信長が本能寺の変で倒れた後、名古屋で呉服小間物問屋を営んでいた伊藤源左衛門であったが、豊臣と徳川との対立に武士の血が騒いだものか、4年後の慶長20(1615)年2月、家業を捨て、豊臣秀頼(1593-1615)を総大将とする大坂方に駆け参じた。後藤又兵衛の配下として徳川方と戦ったが、「大坂夏の陣」で戦死した。松坂屋の創業者では、源左衛門が大坂へ出立した2月13日を命日に定め、供養が続けている。

豊臣秀頼





千姫

## 千姫(1597-1666)との秘話ヒストリー

千姫は、徳川2代将軍・秀忠の長女。母は淀殿の妹・江。秀吉の遺言で秀頼と婚約、7歳で嫁いだ。慶長20(1615)年、大坂落城の折、城を脱出。翌年、家康の曾孫・本多忠刻に再嫁した。1男1女をもうけるが、夫・息子と死別、江戸へ帰った。松坂屋コレクションの逸品「緋綸子地震に水葵模様小袖」は、再婚した時代のもと思われる。

### 伝千姫所用「緋綸子地震に水葵模様小袖」

この小袖の文様水葵は、葵紋と同じく徳川家を示すモチーフであり、千姫の再嫁先の本多家の立ち葵の紋とも通じるものがある。加えて、元々が千姫の菩提寺から出されたものであるため、入手以来、千姫所用と伝えられてきた。

打敷(仏前、仏座を荘厳にするため、仏前の卓上を覆う布)の状態で入手したが、鹿の子と総絞りの贅をつくした布地であったため、これを惜しんで小袖に復元した(模様が一部合わないのはそのため)。

\*近年の研究では、少し時代が下るともいわれている。

伝千姫所用「緋綸子地震に水葵模様小袖」



徳川吉宗

## 徳川吉宗(1684-1751)との秘話ヒストリー

享保(元禄とも)年間に創業されたといわれる呉服店・恵比須屋の創業者・島田八郎左衛門は、8代将軍吉宗の竹馬の友ともいわれ、屋号も吉宗から開店祝いに贈られた「えびす」神像と杯に因むといわれている。大丸屋、越後屋と並んで3大呉服店と称されたが、明治8(1875)年に為替方が破綻したため、呉服店も手放さざるをえなくなり、大阪店を松坂屋が買収した。

### 吉宗から拝領の「えびす神像・大黒像」「えびす盃」

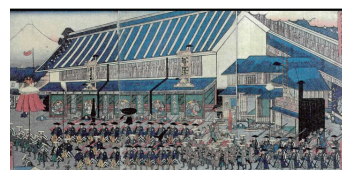
伊藤家は、恵比須屋から商品のみならず、日用道具、暖簾まで買い取ったが、この中に恵比須屋の守護神である「えびす神像」や「えびす盃」も含まれていた。

えびす盃



### 「江戸名所尾張町之図」(芳宗画、文久3年)

幕末の銀座尾張町(現在の銀座五丁目)。恵比須屋の前を大名行列がいく。右端には恵比須屋と肩を並べる大店・布袋屋が見える。明治になって新聞社が軒をならべ、現在は名鉄ニューメルサになっている。



「江戸名所尾張町之図」(芳宗画、文久3年)



宗春がモデルの役者絵

## 徳川宗春(1696-1764)との秘話ヒストリー

尾張藩7代藩主・徳川宗春の治世は、享保15(1730)年から元文4(1739)年の9年間である。

松坂屋の前身、伊藤屋が呉服小間物問屋から呉服太物小売業に業態転換したのが、宗春の時代にあたる元文元(1736)年のこと。

宗春の積極的な経済政策により、名古屋の町が発展を遂げるという時代にも恵まれ、4年後の元文5(1740)年には尾張藩の呉服御用を務めるまでになった。

### 伊藤屋、小売りへ転換

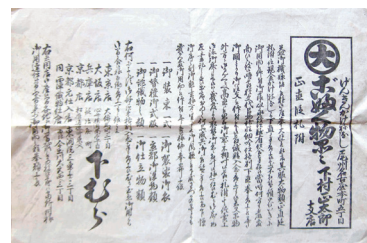
呉服小間物問屋として順調に商いを伸ばした伊藤屋であったが、やがて「元文の改鑄」による新旧金銀貨の引替比率の差損によって、経営が圧迫されるようになった。その打開策として選択したのが、一般大衆相手の現金取引の商いであった。現金売りすることによって資金の回転率を促進し、かつ貸し倒れを防ごうとしたのである。元文元(1736)年11月18日、「現金掛け値なし」を看板に掲げ、呉服太物小売りへ転業した。



『東照宮祭礼図巻』伊藤屋

### 大丸屋、名古屋へ進出

大丸屋の名古屋進出は、宗春が尾張藩主になる2年前の享保13(1728)年のこと。店舗を構えたのは、城下町のほぼ中央にあたる本町四丁目(富田町)。新時代にマッチした「現金かけ値なし」の商法が、宗春の積極的な経済政策とあいまって、たちまち名古屋を代表する大店となった。宗春みずから大丸屋へ来店したこともあったという。



大丸呉服店の引札



電話(052)251-1111 www.matsuzakaya.co.jp

【営業時間】本館地下2階~3階、南館地下2階~4階、北館1階は10時~20時 その他のフロアは10時~19時30分 ただし、本館9・10階、南館6・7・10階、北館地下1階で営業時間が異なる店舗もございます。